

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	改訂モデル・コアカリキュラムに対応した薬学部1年から4年までのシームレスな臨床薬学演習の構築				
研究組織	代表者	所属・職名	薬学部・教授	氏名	内田 信也
	研究分担者	所属・職名	薬学部・准教授	氏名	柏倉 康治
		所属・職名	薬学部・講師	氏名	三浦 基靖
		所属・職名	薬学部・助教	氏名	河本 小百合
	発表者	所属・職名	薬学部・教授	氏名	内田 信也

講演題目	薬学部低学年における症例基盤型学習を基にした臨床薬学演習の構築
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>薬物治療の症例検討を問題基盤型学習（PBL）-チュートリアル方式で行う「臨床薬学演習」では、臨床現場への臨場感を感じながら、薬物治療についての知識だけでなく薬剤師としての心構えや病者への配慮などの態度についても学ぶことが可能である。しかし疾患学や薬物治療学、薬理学などの薬物治療に必要な学習を終えていない低学生に対してのPBLでは、学習用の症例の整備など様々な教育上の工夫が必要になる。さらに、効果的なグループ討論を促すためにチーム基盤型学修（TBL）が重要である。そこで本課題では、低学年でのPBLチュートリアル方式、TBL方式を用いて症例基盤型学習における学年横断運用を目指し、その学習方法の開発を目的とする。</p> <p>薬学部1年生及び臨床薬学演習Ⅰ未受講の学生に対して演習を行い、93名の学生が参加した。高血圧の症例を対象に、7～9名/班でスモールグループディスカッション（SGD）を実施した。教員が全体進行を行いながら、各班には薬学部6年生をチューターに加えることでグループ内の議論を補助した。全てのグループが高血圧に対する治療についてまとめ、全体で発表を行うことができた。演習後の本演習のPBLに関する満足度を評価した結果、回答率は100%であり、総合評価の平均値は87.2/100点（標準偏差:9.0）であった。自由記載において「実践的なことが出来てよかった」や「難しいことも多かったが、もっと知識を増やしたいと思った」など、臨床的な教育への興味や今後の学習への意欲向上が見受けられる記載があった。また薬学部2年次に開講される臨床薬学演習ⅡではTBL方式を用いて心不全症例の介入について検討を行った。薬物治療計画を立案するうえでガイドラインの基となる一次資料の確認の仕方や方法についても講義を行い、各グループは臨床試験情報も用いて、より本症例に適した薬物治療の検討を行った。演習後の満足度評価は83.5/100点（標準偏差:9.1）であり、「1年次より症例が複雑であり、様々なことを考慮して治療計画を考える必要があった」や「薬理学など学んだ知識をアウトプットできよかった」などの記載があった。しかし議論や調査、発表時間が短いなどの課題も明らかとなった。</p> <p>本結果から演習方法を改善していくことで、今後より高度先導的薬剤師の養成へつなげるための低学年での臨床薬学演習法構築につなげていく。</p>